

「話すように書かれた」源氏物語

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ 京大の知」(朝日新聞社後援)。シリーズ1「王朝文学の世界」の締めくくりとなる4回目が1日にあり、京大大学院文学研究科の木田章義教授が「王朝語の源流」というテーマで講演した。源氏物語などの王朝文学が書かれた平安時代の言葉は、日本語の歴史の中でどう位置づけられるのか。今もよく話題になる「ら抜き言葉」の分析などをまじえつつ、文章表現や文法の側面から解説した。

●平仮名表現力のピーク

木田教授はまず、文章表現の歴史の中での位置づけについて語った。

木田氏によると、源氏物語の特徴として「文章の長さ」が挙げられる。1文あたりの平均文字数は、源氏物語が51文字なのに対し、それ以前に書かれた竹取物語や土佐日記はそれぞれ37文字と27文字。平仮名の文献を「しゃべるように書いていた」証拠だという。

話すように書いた結果、形容詞や副詞を使って表される表現力は豊かになった。これは源氏物語に限らず、その少し前に書かれた蜻蛉(かげろう)日記にも見られるという。その点を踏まえ、木田氏は「その時代の人々は平仮名を使って様々な表現ができるようになっていた可能性がある。(源氏物語を書いた)紫式部(の文章力)が突出していたにしても、同じような基盤を持っていたと推定される」と指摘する。



大学院文学研究科 木田章義教授

「源氏物語(が書かれたの)は、平仮名で書く表現力が一番高まった時期だったらしい。文章としてピークになっていた時代に、文学としても最高のレベルまで行った」。木田氏は源氏物語をこう評した。

●平安時代前後の文法

文法の面はどうか。

平安時代の文法は、学校の古文の授業で勉強する文法だ。木田氏は「かちつとした世界のものではない。奈良時代から現代に至るまでの変化の途中に、平安時代の日本語がある」と強調した。

動詞活用の変化で見ると、奈良時代までなかった下一段活用の動詞「ける」が、平安時代になって登場した。もともと下二段活用だった動詞が変化してできたという。

一方、平安時代以降の変化を見ると、活用形の一つである終止形と連体形が一緒になる「終止形の消滅」という現象に加えて、上二段活用と下二段活用の動詞が、それぞれ上一段活用と下一段活用に変わる「二段動詞の一段化」という現象が起こった。木田氏はこうした平安時代前後の変化を踏まえ、「二段動詞の一段化は奈良時代にはすでに始まっていたのではないかと推測する。

「二段動詞の一段化」は現代ではすでに終わっているとされる。しかし、九州地方では近年まで「死ぬる」「捨つる」といった形で二段動詞を使う人がいたという。奈良時代から現代まではおよそ1200年。木田氏は「発音の変化に比べると、文法の変化はかなり長い時間がかかるようだ」と指摘した。



●ら抜き言葉が示すもの

こうした文法の変化は、現代でも続いているという。木田氏は例として「来れる」などの「ら抜き言葉」の存在を挙げた。

「書く」などの五段活用 of 動詞の場合、終止形に「える」をつけると「書ける」のように可能を示す動詞ができる。ら抜き言葉は「捨てる」などの五段以外の動詞に「える」をつけたものだ。

この場合「られる」をつけると文法上は正しくなるが、今度は意味が可能なのか、受け身なのか尊敬なのか、すぐには分からなくなる。木田氏は「(ら抜き言葉は)『可能』だけを表現したいということ。合理的な変化だ」と評する。

木田氏によると、可能を示す動詞が出始めたのは室町時代。明治時代になって現在のような形ができあがった。ら抜き言葉の登場は、可能を示す動詞の作り方が五段動詞以外にまで及び始めたことを示すという。

「王朝語の源流」というテーマの締めくくりに、木田氏はこう語った。「今もわれわれは変化の途中にある日本語を用いながら生活している。紫式部も、文章の表現力が全体に高まった時代、やはり同じように言葉がどんどん変化して流れている最中に、ああいう文章を書いて生きていた」

(※原稿及び写真は朝日新聞社提供)